

英語の中間構文の特徴

総合複合語の形成から考えて

柘植 美波

1. はじめに

英語の中間構文 (middle constructions)とは、“The book sells well.”のように、形式は能動態であるが、意味は受動態の要素が見られるものである。その構文から派生されたと考えられる総合複合語 (synthetic compounds)があり、例えば、*best-selling* や *best-seller* などが見られる。総合複合語に関する先行研究は多いが、中間構文由来の複合語に関する研究は数少ないように思われる。本稿の目的は、*best-selling* などの中間構文から派生されたと考えられる総合複合語がどのように形成されるのかということ、総合複合語に関する従来の研究を用いて考え、その語形成の分析を基に、中間構文の特徴を明らかにすることにある。2節で中間構文の特徴及び総合複合語に関する従来の分析を概観し、3節では事実観察を基に、執筆者の提案を挙げる。

2. 中間構文の特徴と総合複合語に関する分析

英語の中間構文の統語的な特徴として、①通常、副詞が含まれていること (Keyser and Roeper (1984), Fellbaum (1985), etc.)、②潜在的動作主 (implicit agent)が含まれていること (Fagan (1988), Kageyama (2006), etc.)が挙げられる。また当該構文の意味的な特徴については、③特定の事象 (event)を示すことができず、総称的な文 (generic sentences)のみで用いられること (Keyser and Roeper (1984), Kageyama (2006), etc.)が挙げられる。③の特徴について、Kageyama (2006)は、中間構文では事象抑圧 (event suppression)が作用されるため、事象を表さないと分析している。中間構文を形成する動詞の項構造 ($Ev(x \langle y \rangle)$)に事象抑圧が働くことによって、Event 項と Agent を表す項 x が抑圧され、その結果、($Ev^{\wedge}(x^{\wedge} \langle y \rangle)$)となる。(記号 \wedge は抑圧を表す。) 加えて、ラムダ記号によって property description を表す構造へと推移し、 $\lambda_y(Ev^{\wedge}(x^{\wedge} \langle y \rangle))$ と表される。この作用により、中間構文は事象を示すことができない。

上述の特徴を持つ中間構文から派生されたと考えられる複合語について、従来、様々な議論がされてきた。まず Keyser and Roeper (1984)は、中間構文から成る複合語は、第一姉妹の法則 (First Sister Principle)に従うと適格だと予測されるが、実際には不適格であると述べている。例えば、“They bribe bureaucrats easily.”という他動詞構文に、中間構文を形成するための middle rule を syntax で適用した結果が“Bureaucrats bribe easily.”となる。その文の動詞 *bribe* の第一姉妹として考えられる要素は、副詞 *easily* である。*easily-bribing* という複合語は第一姉妹の法則に従うと、適格であると予測されるが、実際、副詞 *easily* は動詞 *bribe* の第一姉妹ではないため、**easily-bribing* という語は成立しない。この結果より、中間構文は lexicon では形成されず、syntax で middle rule が適用され、形成される。一方 García de la Maza (2011)は、特殊化した場合は、中間構文由来の複合語は適格であると分析している。とりわけ、動詞 *sell* と *read* で形成される中間構文は頻度が高く、よく確立するため、*easy-reader* や *best-seller* のような複合語が見られる。従って、中間構文由来の複合語について従来の分析では意見が分かれるが、形成方法については詳しく述べられていない。

英語の複合語の形成については、Lieber (1983)の分析が代表的なものである。同分析では、語彙構造を用いながら、素性浸透 (Feature Percolation Conventions)と項連結の原理 (Argument-linking Principles)の2つの原理によって複合語を構築する。素性浸透とは、語彙構造上、範疇素性を含む語幹形態素あるいは接辞形態素の全ての素性が、その形態素を支配している最初の枝分かれ節点へ浸透するというものである。一方、項連結の原理とは、複合語の語彙構造において、第二要素の V または P は全ての内項と連結できなければならない、もし第一要素が複合語の中で free ならば、項を取る語幹の意味項として解釈可能でなければならないというものである。Lieber は、中間構文の複合語は分析していない。また、当該構文由来の複合語がどのように形成されるのかについて、執筆者が知る限りでは、提案がないようである。

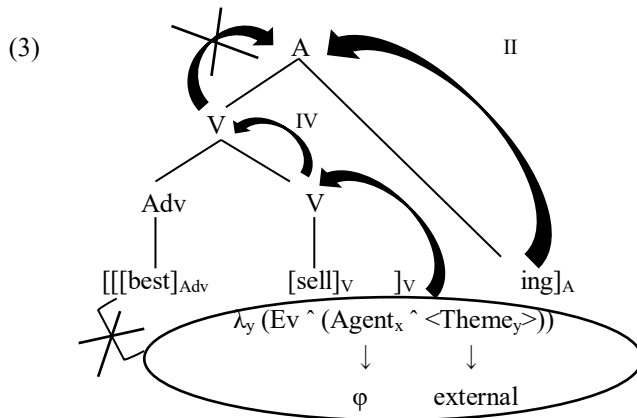
3. 事実観察と提案

1億語の大規模コーパス British National Corpus (BNC)で中間構文とその構文から成る総合複合語を収集した。中間構文については、2節の①、②、③の3つの特徴を満たしているかどうか確認している。まず、BNCで収集した Adv-V-ing 形の総合複合語を以下で示す。

- (1) a. Best-selling books, magazine articles and newspaper columns publicized his ideas. (BNC: AHV)
 b. Best-selling novelist Catherine Cookson, the queen of romantic fiction, becomes a dame. (BNC: CBF)
 (2) This is thanks to handling and power which, to my mind, would have posed a greater threat to the Honda NSX's title of best-handling car than any Mazda RX-7. (BNC: BM5)

最も多く見られたのは(1)のような形容詞 *best-selling* であり、(1a)の *books* のような「物を表す名詞」を修飾するものもあれば、(1b)の *novelist* のような「人を表す名詞」を修飾するものもあるということが明らかである。また(2)で示したように、*best-selling* 以外にも、中間構文由来の総合複合語が見られる。BNC で検索できなかった表現についてはインフォーマントチェックによる調査を行った。例えば、動詞 *write* が関与している中間構文については受け入れられず、その構文から派生された **well-writing* や **best-writer* のような複合語も受け入れ不可能であることがわかった。また、動詞 *fold* が関与している中間構文については受け入れ可能だと判断され、そこから派生された複合語 *easy-folding* についても受け入れ可能であるとされた。しかし動詞 *fold* が関与する複合語について、*easy-folding* の副詞を変え、*best-folding* にすると受け入れ不可能と判断するインフォーマントもいた。従って、人によって複合語における副詞の生起に揺れがあることがわかった。以上の事実観察の結果、中間構文から派生される総合複合語は認可されうるということがわかった。

従来の研究で提案されなかった中間構文由来の複合語の形成方法について、Lieber (1983)の「素性浸透」と「項連結の原理」、そして Kageyama (2006)の「事象抑圧」を用いて提案する。*best-selling books* を例として当該複合語の生成方法を示せば、(3)のようになる。



動詞 *sell* の項構造は、事象抑圧を受け、外項 Agent がゼロとなり、内項 Theme が外項になる。その項構造は素性浸透の Convention IV (Lieber 1983: 253)より、枝分かれ節点 V へ上がるが、Convention II (Lieber 1983: 253)より、最も高い枝分かれ節点 A へは上がれない。さらに、事象抑圧の作用より、内項は外項に変換されたため、[]_α は満たされず、free となる。副詞 *best* は Manner 解釈を持つ副詞であるため、意味項として []_α に入ることができ、項連結の原理を満たすことができる。

4. 結び

best-selling 以外にも Adv-V-ing 形の総合複合語が存在するという点から、中間構文から成る Adv-V-ing 形の総合複合語は認可されうる。Keyser and Roeper (1984)は中間構文を syntax で扱い、その根拠として当該構文の複合化はできないと考えているが、その複合化ができるため、この分析は不充分となる。本研究では、Lieber (1983)と Kageyama (2006)の分析を用いて、中間構文由来複合語の派生構造を示唆した。形容詞については、*best-selling books/novelist* のように、「物を表す名詞」と「人を表す名詞」のどちらも修飾するものが見られたが、この種の例を説明すること、そして、なぜ中間構文由来の複合語の中で受け入れ可能であるものと不可能であるものが存在するのかを追究していくことが、今後の課題となる。

参考文献

- Fagan, Sarah M. B. (1988) "The English Middle," *Linguistic Inquiry* 19, 181-203.
 Fellbaum, Christiane (1985) "Adverbs in Agentless Actives and Passives," *CLS* 21, Part 2, 21-31.
 García de la Maza, Casilda (2011) "The Semantics of English Middles and Pseudo-middles," *Morphosyntactic Alternations in English*, ed. by Pilar Guerrero Medina, 161-181, Equinox, London.
 Kageyama, Taro (2006) "Property Description as a Voice Phenomenon," *Voice and Grammatical Relations*, eds. by Tsunoda, Tasuku and Taro Kageyama, 85-114, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam.
 Keyser, Samuel Jay and Thomas Roeper (1984) "On the Middle and Ergative Constructions in English," *Linguistic Inquiry* 15, 381-416.
 Lieber, Rochelle (1983) "Argument Linking and Compounds in English," *Linguistic Inquiry* 14, 251-285.